

[学術論文]

# カント哲学前批判期の解明

Die Erklärung der frühen kritischen Phase von kantischer Philosophie

森 哲 彦

Tetsuhiko Mori

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 7

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 7号  
2007年6月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN

JUNE 2007

[学術論文]

## カント哲学前批判期の解明

### Die Erklärung der frühen kritischen Phase von kantischer Philosophie

森 哲彦

von Tetsuhiko Mori

「カントは、伝統的存在論や形而上学を、神学的範疇、ヴォルフ哲学およびライプニッツを通して精通していた。...しかしカントの主要事の一つである。すなわちカントは先人や同時代人との対決において疑いのない確実性を欲することである」(Jaspers,K.(1957):Kant,186.)。

要旨に代えて カント著書『純粋理性批判』を解読するに際し、カント哲学前批判期をどう取り扱うかについて、二つの問題が見られる。その際、まずカントのどの著作から取り扱うべきか、これが第一の問題である。さてカントは1781年のヘルツ宛の手紙で、批判期の『純粋理性批判』にあつては「(1770年著作)『可感界と可想界』という標題のもとで私たちが一緒に論究した...研究の成果を含む」とする。また1783年のガルヴェ宛の手紙や同年のメンデルスゾーン宛の手紙でも『純粋理性批判』について「少なくとも12年間に渡る反省の所産」であるとす。このことから『純粋理性批判』解明のための有効な方途として、前批判期を狭義には1770年著作『可感界と可想界』をもって始めるとする論者もある。しかし広義に考えれば『純粋理性批判』で、認識対象でなく方法が重視される点は、早くもカントの1747年処女作『活力測定考』に見られるところである。また神の存在証明の問題も1755年著作『天界自然史論』に伺える。このことから本論では、広義の観点から解明する。この広義の立場を取るものに、例えば、カッシーラー (1918)、シュルツ (1965)、カウルバッハ (1969)、浜田義文 (1967)、高橋昭二 (1969) の諸研究がある。

次に1755年著作『形而上学的認識の第一原理の新解明』は、大半が矛盾律、同一律、決定根拠律という形式論理学を論述するものであり、『純粋理性批判』の内容に直接的に関連しないためか、従来論評されることは少ない。例えば、カッシーラーやカウルバッハは、他のカントの著作に比してこの著作を簡単に扱う。これが第二の問題である。しかしこの著作はカントの最初の形而上学の可能性を論究したものであるゆえ、本論では他の著作を同様に取り上げる。なおヤスパース (1957) は、カント哲学前批判期の諸著作のうち、この著作から論評している。

キーワード：自然科学 (Naturwissenschaft)、方法 (Methode)、形而上学 (Metaphysik)、  
神の存在証明 (Beweis des Daseins Gottes)、自然哲学 (natürliche Theologie)

## I 序

1 カント (I.Kant) 批判哲学は、大陸の理性論とイギリス経験論の対立についての調停、統一であり、従来の形而上学の批判と見なされている。つまり理性論の哲学は、認識の根底を経験に先行する理性の明証性に求め、数学的思考方法による形而上学を打ち立てようとする。この理性論が、後にカントによってライプニッツ=ヴォルフ (G.W.Leibniz=C.Wolff) の独断的形而上学として批判される。一方、経験論の哲学は、認識の起源を感覚的经验に求め、もっぱら経験心理的分析に従事したところから、経験の相対的知識が問題となる。この経験論は、後にカントによってヒューム (D.Hume) の懐疑論として批判される。このようにしてカントは、経験的認識つまり経験の可能性と人間の理性認識能力との吟味から、新たな形而上学を検討する。

2 カント批判哲学成立の金字塔は、1781年著書『純粹理性批判』<sup>1)</sup>である。ではこの批判哲学成立の前提は、カント自身の文献史上、いつの時期に定められるか。この成立期はカントによれば、1770年の教授就任論文『可感界と可想界の形式と原理』<sup>2)</sup>である。この事実をカントは『純粹理性批判』の出版を告げる、1781年5月1日付ヘルツ (M.Hertz) 宛の手紙<sup>3)</sup>の中で述べている。すなわち「この度....『純粹理性批判』という標題の私の著書が出版されます」(X266)、「この著書に含まれているのは『可感界と可想界』という標題のもとで、私たちが一緒に論究した諸概念から始まる、あらゆる多様な研究の成果を含んでいる」(X266)とする。またカントは、1783年8月7日付ガルヴェ (C.Garve) 宛の手紙<sup>4)</sup>で『純粹理性批判』について「12年以上もかかって慎重に考え抜いた材料の論述」(X238)であるとする。このようにカント批判哲学の成立には、1781年の『純粹理性批判』に約10年先行する1770年『可感界と可想界』と直結していることが伺われる。なおこの二つの著作は、論究面でこのようにに関連しているが、双方には、相違する重要点が含まれているので、考察の便宜上『可感界と可想界』については、哲学前批判期として取り扱うものとする。

3 カント批判哲学成立の前史は、どのように考えられうるか。この批判哲学の生成期は、カントが『純粹理性批判』において、理性認識の歩みを示すように、次の三つの時期に区分される。つまり第一期は、純粹理性の少年期で独断的、第二期は、青年期で懐疑的、第三期は、壮年期で批判的 (B789) である。そしてこの時期区分に合わせて考察したものにパウルゼン (F.Paulsen) の区分が挙げられる。それは、1 独断的—合理的、2 懐疑的—経験的、3 批判的—合理的<sup>5)</sup> の各時期である。そこで筆者は、カント哲学前批判期を論述の便宜上、カントの著作の主要問題の内容をグループ分けし、その区分を文献史順に、仮に次の四期に設定しておく。すなわち、1 自然科学期、2 独断的、論理的形而上学期、3 経験的、懐疑的形而上学期、4 批判的形而上学準備

期である。

この哲学前批判期は、先行する学問の多様な影響を受け、初めは主として従来の自然科学研究に志向し、次に異なった種々の形而上学の問題に取り組み、さらに変容して従来の形而上学を批判して行く時期である。従ってこの時期には、カント批判哲学で取り扱われる様々な諸問題、つまり一元論と二元論、感性・悟性と理性、仮言的命法と定言的命法、認識論と存在論等々の萌芽が、見受けられるところである。

## II 自然科学期

カントが最初に取り組んだ自然科学期の大部な代表的著作として、1『活力の真の測定に関する考察』（『活力測定考』）1747年<sup>6)</sup>、2『天界の一般自然史と理論』（『天界自然史論』）1755年<sup>7)</sup>を取り上げる。カントは、ここでは自然現象と自然法則における空間と時間の理論と哲学的方法を展開するものとなる。

### 1 『活力測定考』1747年

カントは、1746年、ケーニヒスベルク大学に卒業論文として『活力測定考』を提出した。かれはその論文を、1747年に加筆し、1749年に処女作として出版する。カントがケーニヒスベルク大学で最も影響を受けた教授は、クヌッツェン (M.Knutzen) である。クヌッツェンは、ライプニッツ＝ヴォルフ哲学の立場に立ち「学校哲学の範囲を本質的には越えていない」<sup>8)</sup> 学者である。とはいえクヌッツェンは「ケーニヒスベルク大学の教師たちのうちで、学一般のヨーロッパ的概念を代表」<sup>9)</sup> している。そして彼は「カントに初めてニュートン (I.Newton) の書物を貸し与えた人」<sup>9)</sup> である。カントにとって「ニュートンは、生涯を通じて学そのものの人格化された概念を表示」<sup>9)</sup> していた。とはいえカントのこの時代は、正しく「フリードリッヒ (Friedrich II der Große) の世紀」であり、啓蒙の時代でもある。それゆえカントは『活力測定考』の緒言で「幸いに今はニュートンやライプニッツのごとき盛名も....真理の発見の妨げになるのなら、あえて無視しても差支えない」(I7) とし、緒言の題辞でセネカ (L.A.Seneca) の言葉「家畜のように、行くべきところに行かない」(I7) ことを掲げている。しかもカントによれば、形而上学は「真に根本的な認識の入口に立っているにすぎない」(I30) とし「望ましいことは、大きな哲学を立てようとするのではなく、真に根本的な哲学の方である」(I31) とする。

さてこの『活力測定考』で、カントは17世紀における活力 (lebendige Kraft) の測定をめぐるデカルト (R.Descartes) 学派とライプニッツ学派との間の「活力論争」に参加し「最も安全な道を選び、双方の学派が満足するような見解を取り上げる」(I32) として、一つの調停的役割を果そうとするものである。

1 まずカントによれば、物体の力一般の形而上学的概念について「一般に運動している物体は力を有する」(I17)とされている。そしてその「力とは、物体に全く外部から伝えられるもので、その物体が静止しているならば、物体は全く力をもたないと思われる」(I17)であろう。しかも「アリストテレス (Aristotelēs) を除いて、ライプニッツ以前の学者〔デカルトを含む〕はことごとくこの見解を持っていた」(I17)。しかしながら一人「ライプニッツは、物体には、本質的な力が内在し、その力は、むしろ延長 (Ausdehnung) に先立つ物体の属性であると説いた最初の人」(I17)であった。つまりライプニッツとしては、物体の属性は延長ではなく、延長に先立って物体には、力が内在しているということである。そしてカントによれば「物体の力は運動力 (vis motrix) と呼ぶよりは、作用力 (vis activa) と呼ぶ方が、はるかに適切」(I18)なのである。このことよりカントは、ライプニッツ学派とデカルト学派の力の測定法の相違を示す。つまり「世人はライプニッツの出る以前には、デカルトの唯一つの命題に服していた。それは現に運動している物体を含めて、すべての物体にその速度の一乗 ( $mv$ )<sup>10</sup> だけを力の測度として認める」(I33) というものである。ところがこれに対してライプニッツは、新しい法則を発表する。つまり「デカルトは、運動体の力を速度の一乗 ( $mv$ ) によって測定しようとし、他方、ライプニッツは、力の測定として速度 (Mass) の二乗 ( $mv^2$ ) を認めよう」と (I33) したのである。ここから活力論争が発生した。そこでカントは、この対立論争解決のため、力学の根本法則「原因と結果の量は、等しいという法則」(I50) としての普遍的法則をカント流に解釈しようとする。つまりカントは、この力学の根本法則は「数学の物体」(I140) には存在しているが「力を自分の内部で増大させる能力が備わっている」(I140) ところの「自然の物体」(I140) には許されないものとみなす。そして「数学の物体の力」の測度には、幾何学の立場からは、デカルト方式 (I140) が正しいとし、「自然の物体」の力の測度には、活力の思想からは、ライプニッツ方式が妥当とするのである。そこでカントは、一方でデカルト理論では「外部の駆動力に基づく力は、速度の一乗に比例する、言い換えれば、それは死力 (tote Kraft)」(I144) である。他方でライプニッツ理論では「速度の二乗を測度とすることはもはや死力でなく活力」(I144) である。しかもこのようにデカルトとライプニッツが「真正面から対立しているときでも、真理は見い出される、というのは、いわば人間理性の榮譽を弁護するに足る事実である」(I149) からとする。そしてカントは、双方がそれぞれ運動するという提案を行う。そこでカントは、デカルト学派とライプニッツ学派の「双方から見て、真理の落ち着く点を決定するのに困難はなかった」(I181) とし「これをもって、われわれは初期の仕事を完了した」(I181) として、「活力論争」の解決を、カント自ら遂行したとするのである。

2 しかしながらカントの『活力測定考』の内容は、ダランベール (D'Alembert) の『動力学論』1743年<sup>11)</sup> と比較すれば、純粹自然科学的見地から見て、不十分であるように見える<sup>12)</sup> とさ

れている<sup>13)</sup>。だがわれわれの関心をひくものは『活力測定考』の内容よりも、その著作の哲学的方法である。つまりカントのいう「活力論争」の解決とは、ライプニッツ学派説の「活力という事柄自体を否定しているのではなく、もっぱらその認識の方法（*modus cognoscendi*）を否定している」（I60）ということである。換言すれば、ライプニッツのいう目的論的自然観とデカルトのいう機械論的自然観との緊張の調停を図ろうとするものと言えよう。従って、たとえデカルトやライプニッツのような盛名の学派であろうとも「もしそれが真理を発見することの妨げになるなら...他のいかなる説にも従わない」（I7）とする。それゆえ『活力測定考』の特質は「真理を発見する」（I7）ために「人は方法を持たねばならない」（I93）ということであり「一言でいえば本論文全体が、ひとえにこの方法の所産であると考えられる」（I94）のである。またカントは、真理の意味ということについて緒言で次のように述べている。つまり「自己の力に或る種の高貴な信頼を寄せることは」、「真理の研究には極めて有益」（I10）である。そしてカントは、このように真理に従うという学問の格律を立て「私はこの確信の上に立つものである。進もうとする道はすでに予示されている。私はこの道を行き、いかなることがあっても行く手を拒むことはさせないつもりである」（I10）と宣言するのである。

## 2 『天界自然史論』 1755年

『活力測定考』の自然科学研究に続いてカントは、その7年後の1754年に著作『地球自転論』<sup>14)</sup>を2回に分けて連載した。カントは、この著作の末尾で、月と地球の関係を推測した上で、この論題に考察を加え、一つの体系として「宇宙生成（進化）論（*Kosmogonie*）」（I191）にまとめるとする。このまとめられた体系研究が『天界自然史論』<sup>15)</sup>である。この著作の別名副題には「ニュートンの原理に従って、宇宙全体の構造と機械的起源（*Ursprung*）を論じる試論」（I215）とある。確かにカントは『活力測定考』では、デカルト理論に基づく力の死力とライプニッツ理論のいう力の活力の双方の運動の存在を認めていた。しかし『地球自転論』や『天界自然史論』では、自然、宇宙という物体の生成、進化、形成及び起源を試論とするように、明らかにライプニッツ理論に基づく力を是とするものとなる。

1 カントは『天界自然史論』で、宇宙の生成を論述するが、他方で神の存在を認める。まずカントによれば、私は「人間の理性の力をはるかに超えるかにみえる」（I221）宇宙の生成の体系を認めるとする。しかし「私は、神の真理が無謬であることをきわめて深く確信しているので、神の真理に矛盾するものは、すべてこの真理によって反駁されるものとみなす」（I222）とする。それゆえ「私の体系と宗教は、まさに一致する」（I222）ので、何ものを恐れなくとすることをもって、無神論者でないことを表明する。さらにカントは、神と自然の関係について物質の持つ法則から神の存在を証明する。つまり「物の根源的素材である物質は、かくて或る法則に結合

しており....物質はこの完全性の計画から免れる自由を持たない」(I228)のである。それゆえ「自然は混沌のうちにあつてさえも規則的に、かつ秩序正しく行動するほかないのであるから、まさにこの理由によって神は存在する」(I228)のである。ここからカントは、理性的立場から神の存在証明を行い「悪意ある狂熱家たち」の「有害な解釈」(I228)を排斥するのである。

2 カントが『天界自然史論』の副題で「ニュートンの原理に従って」(I215)としていたその原理は、引力と斥力であり、それを「ニュートン哲学から借りてきた」(I234)としている。カントは、宇宙生成の秘密をその引力と斥力を用いて説き明かそうとする。カントによれば「宇宙を最も単純な混沌状態へ還元してから、引力と斥力以外のいかなる力をも、自然の偉大な秩序の展開のためにもちいることはしなかった。この二つの力は、等しく確実であり、等しく単純であり、また同時に等しく根源的かつ普遍的」(I234)である。そしてこの二つの引力と斥力は、相互に反発しあい「相争うことによって、いわば自然の永続的生命ともいべき運動を生み出す」(I265)。そしてそこに「粒子の巨大な渦巻きが発生し」(I265)その「引力の中心点にある物体が太陽」(I266)なのである。

3 カントによれば「太陽系あるいは惑星宇宙と呼んでいる体系(System)は....すべて円形の循環運動をしているから、二つの力を前提する」(I243)。すなわち第一の力は、直進力(schließende Kraft)であり、第二のそれは、太陽に向う落下力(sinkende Kraft)、求心力あるいは重力(Gravität)と呼ばれる(I243)。そしてカントは「宇宙の体系的構造という言葉」(I246)について「宇宙に属するすべての惑星と彗星(Komet)は、それらが一個の共通の中心体を周って公転することによって、もともとすでに一つの体系を形成している」(I246)と説明する。この「宇宙の体系的構造」にとって「惑星軌道の方向や位置が一致しているのも....惑星を運動させた物質的原因との必然的一致の結果」(I262)である。しかしながらカントによれば、ニュートンは「惑星系の空間中に拡がった運動の共通性を保持するような物質的原因を承認できなかった。彼は神の直接的な手がこの秩序を、自然の力をもちいることなしに、秩序づけた」(I262)としている。この場合、ニュートンは「自然の一般化した法則の作用と神の手を、相互に区別する境界設定を認めた」(I339)のである。それゆえカントはニュートンが到達できなかった世界を理性的立場から「宇宙の体系的構造」として説明しようとしたといつてよいであろう。

またカントは、後年の1788年著書『実践理性批判』の結論<sup>16)</sup>において見られるような、自然法則と神の存在について、次のように表現している。つまりその言明は「宇宙構造は、その測り知れない大きさによりまた無限の多様性と美を思うとき、われわれは沈黙のまま驚嘆する。他方で知性(intellectus)は、それほどの壯観、それほどの大きさが唯一の一般的法則から秩序正しく永遠に流れているさまを見た別種の歓喜をおぼえる」(I306)。この別種の歓喜とは「神が存在

する」(I228)ということである。この事態をカントは、また次のようにも述べている。つまりカントは「宇宙の美と完全な秩序と最高英知者的な創造者を確認する証明の価値を全面的に承認する」(I222)のである。従って『活力測定考』と同じく『天界自然史論』でも、われわれの注意を引くものは、その宇宙生成論のみならず、その論を説明するための自然法則の承認と神の存在の証明という哲学的方法なのである。

### Ⅲ 独断的、論理的形而上学期

独断的論理的形而上学期の著作として、1『形而上学的認識の第一原理の新解明』(『新解明論文』就職論文)1755年<sup>17)</sup>、2『神の存在論証の唯一可能な証明根拠』(『神の存在証明』)1763年<sup>18)</sup>、3『自然神学と道徳との原則の判明性に関する研究』(『判明性研究』懸賞論文)1764年<sup>19)</sup>を取り上げる。カントは『活力測定考』で「われわれの形而上学は、多くの学問と同様に、真に根本的な認識の入口に立っているにすぎず、それを越えるのが何時になるかは、われわれには解らない」(I30)としているが、その入口をここで見い出そうとするものである。

#### 1 『新解明論文』1755年

ケーニヒスベルク大学に提出した就職論文『新解明論文』が、カント最初の形而上学著作である。ところでカントは、同年の1755年『天界自然史論』において、すでに自然法則の承認と神の存在証明を行っていたが、ここ『新解明論文』では、これらの方法を形而上学的に認識すること、つまり「認識の第一原理」(I387)を新しく解明しようとするものである。

1 第一章においては、矛盾律が取り上げられ、矛盾律に基づく形式的原理を吟味する。まず「すべての真理に対する唯一の絶対的で普遍的な第一原理は存在しない」(I388)という第一命題に対し、カントは、これを批判する。そこでもし第一原理が存在するとすれば、それは「唯一の第一原理は単純な命題」でなければならない。しかも第一原理の「命題は肯定的であるか否定的でなければならない」(I388)。しかしこの矛盾律の命題は、成立不可能である。そこで第二命題では「すべての真理に対する絶対的な第一原理は二つある」(I389)ものとなる。その一つは、肯定的真理に対するもの、今一つは、否定的真理に対するものである。これら二つの命題は「両方とも同一律と呼ばれる」(I389)。それゆえ「真理は二種類あるのであるから、二種の真理に対し、二種の第一原理を対応させ、一方を肯定的第一原理、他方を否定的第一原理と呼ぶ」(I391)とする。このことから第三命題では「真理を導出する最高原理という資格をえることに関しては、同一律の方が矛盾律よりも優位にある」(I390)を確認する。このように矛盾律、さらには同一律の検討から、真理の最高原理の命題は「第一に最も単純で、第二に最も普遍的なこ



とばで表現されなければならない」(I390)ものとなる。換言すれば、人間の推理は「主語に対する述語の同一律を呈示すること」(I391)に帰結する。このことにより、形式論理学の意味づけが明かにされる。しかし人間の推理と異なり「神はこのような推理を必要としない」(I391)し「神は分析を必要としない」(I391)のである。

2 第二章では、決定〔規定〕根拠律が取り上げられる。その決定について、第四命題では「決定するとは述語〔Aである〕が、その反対〔Aでない〕を斥けて定立することである。主語と述語の関係で主語を決定するものが根拠といわれる」(I391)。その「根拠は、先行的根拠と後続的根拠に分けられる」(I391)。その「先行的根拠」は「原因根拠 (ratio cur)」、「存在根拠 (ratio essendi)」と呼ばれる。これに対して「後続的根拠」は「事実根拠」「認識根拠 (ratio cognoscendi)」(I392)とされる。ここにおいてカントが根拠を「存在根拠」と「認識根拠」に分けて論述していることは、根拠の二元論を示していることになる。しかし第五命題では、二元論的といっても先行的であれ、後続的であれ「決定根拠 (ratio determinans) なしには、いかなるものも真理ではない」(I393)のである。それゆえ「真理の認識が、根拠の考察に基づくことは明白である。〔その際〕 確実性のみが問題であるとすれば、後続的決定〔認識〕根拠で満足する」(I394)。だがさらに今一方の先行的決定根拠「存在根拠」が求められる。そこでカントは「認識根拠」に対する「存在根拠」の優位性を示そうとする。そこから次に「神の存在証明」が取り上げられる。それが第六命題「或るものが自らの存在の根拠を自らのうちに持つことは不合理」(I394)である。それゆえ「絶対必然的に存在するものは何であれ」(I394)そのものは「いかなる先行的決定根拠を持たない。そのものは存在する」(I394)。すなわち第七命題「可能性に先行して存在するものがある。すなわち絶対必然的に存在するものがある。それが神と呼ばれる」(I395)。このようにして「万物の可能性の絶対必然的な原理として、唯一の神が存在する」(I395)ものとなる。これが「神の存在証明」のうちの「最も本質的な証明である」(I395)。次に絶対必然的な神とは異なり、第八命題では「偶然的ないかなるものも、その存在を先行的に決定する根拠を必要とする」(I396)。従って「存在するものにおいては、先行的決定根拠が問題となる」(I397)ので、存在するものが、もし「偶然的に存在するなら、決定根拠が先行していなければならない」ものとなる。

3 カントは「神の存在証明」に続いて「自由の問題」を取り上げる。そこで第九命題では、決定根拠律を困難にするという批判を取り上げ、その困難を解消しようとする。その際、決定根拠律の反対者のなかの第一人者であるクルジウス (C.A.Crusius) は「決定根拠律の表現の多様性とあいまいさを攻撃する」(I398)。しかしカントによれば「万物は自然の連結に組み込まれている。従って或る出来事や自由な行為の反対を選ぶ人は、不可能なことを望んでいることになる」

(I399) としてクルジウスを批判する。またクルジウスの論敵であるヴォルフ主義者は「絶対的必然性と条件的必然性を」(I399) 区別しようとする。しかしカントによれば「条件的必然性、とくに道徳的必然性を絶対的必然性から区別する場合、そこでの問題は、必然性の強さと効果ということではない。むしろ問題は、必然性を与える原理、むしろものごとが何によって必然的か」(I400) ということである<sup>20)</sup>。つまり必然性の原理の根拠は「自然の盲目的作用に依るのではなく...神の無限の知性に基づく」(I400) のである。しかも「神の行為は自由である」(I400)。こうしてまた人間の自由な行為もまた「意志の与えられた知性の指令によってのみ起こされる」(I400) ものとなる。そして「行為が最善の表象〔神〕に一致して決定された場合、自由 (libertas) といわれる」(I402) のも「自発性 (spontaneitas) は内的原理から発する行為」(I402) だからである。それゆえ「自由の概念は、正しい理性と合致したもの」(I403) であり、しかも決定根拠律を示すものである。

4 第三章でカントは、第一原理としての内的原理から派生する「形而上学的認識のための二つの原理」(I410) として「継起の原理」と「共存の原理」を取り上げる。まず「継起の原理」として第十二命題で「実体は他の実体と連関をもつ限りにおいてのみ変化することができる。そしてそれらの実体の相互依存関係は、それらの実体の状態の相互的变化を決定する」(I410) とある。つまり「変化とは諸決定の継起である」(I411) とは、万物の連関を意味している。このカントいう「継起の原理」によって、実体の相互関係を有しない「ライプニッツの予定調和説 (Harmoniam praestabilitam)<sup>21)</sup> は根底からくつがえされる」(I412)。つまりカントはライプニッツ的形而上学から離れた実体論を提起するものとなる。次に「共存の原理」は第十三命題「有限な諸実体は、自分自身の存在によるだけでは如何なる相互関係も持たない。それらはそれらの存在の共通の原理、すなわち神の知性によって相互関係に立つよう維持される限りで、相互関係に立つ」(I413) とある。つまり「実体の諸決定は、必ず相互的である。いいかえれば相異なった諸実体は相互に作用する」(I415)。さらにこの相互作用が「ニュートンの引力」(I415) と呼ばれるものである。カントは、ここにおいて自然一元論としてニュートン引力説を哲学の中に導入しようとするのである。さらにカントは、空間にも「実体の相互作用が存在する」(I415) として「神の特殊な絶えざる介入」を前提とする「マールブランシュ (N.Malebranche) の機会因 (causas occasionales) による実体の相互作用といったものが容認されるわけではない」(I415) とする。ここにおいてカントは「深遠な形而上学的認識の二つ〔継起と共存〕の原理」(I416) によって形而上学が、まじめに耕されるなら、形而上学は「決して不毛でないということが判明する」(I416) であろうと結論する。

## 2 『神の存在証明』1763年

カントは『天界自然史論』では、宇宙の生成「宇宙の体系的構造」(I246)に「神は存在する」(I228)ことを前提としていた。次いでカントは、1763年著作『神の存在証明』で、神は如何にして存在するかを証明するために、あらゆる種類の神の存在証明を分析的手法で明らかにしようとする。だが問題なしとしない。つまりカントによれば「神は存在するという認識は、われわれのあらゆる認識のうちで最も重要なもの」(II65)であるが、しかし「この目的に達するためには、形而上学の底無しの深淵にまで近づかなければならない」(II65)。そこでカントは、従来の形而上学を吟味するものとなるが、ここでは「自然的な常識が偽りの術に惑わされない」(II68)限り「真理と効用に導いてくれる」(II65)ものとする。

そこでまずカントは「形而上学の足場の悪い滑りやすい土地」(II71)では、存在の概念定義から出発する「方法マニア...数学者の真似」(II71)でなく、確実なものから始めるとする。以下では、神の存在の証明根拠そのものの考察が行なわれる。

1 第一部、第一考察で、カントは、可能なものからの存在証明を吟味する。その際、カントの命題は「存在はなんらかのものの述語 (predictum) または規定ではない」(II72)というものである。つまり述語は「可能的なものとしてしか存在できない」(II72)ので「絶対的に必然的なものの存在を証明しようとする場合」(II72)、「存在はそういった述語の中には決して見い出されない」(II72)。従ってカントによれば、可能的なものから出発する存在の証明は有りえないものとなる。この第一考察の証明根拠の吟味について、カントは「根拠としての単に可能なるものの概念から帰結した存在が推論される」(II156)、「有名な証明」(II156)を持っているとする。それが「いわゆるデカルト的証明」(II156)である。

2 第二考察で、カントは「存在を前提としている限りでの内的可能性 (innere Möglichkeit)」(II78)を吟味する。その際、カントの命題は「いかなるものの内的可能性もなんらかの存在を前提とする」(II78)というものである。その場合、カントによれば、可能性の存在根拠は形式的根拠と現実的根拠が含まれている。ここから「なんらかの可能性が存在して、しかもなんらかの現実的なものが存在しないということは、自己矛盾」(II78)となる。従って「すべての可能性は...現実的なものの帰結という形で与えられる」(II79)ものとなる。そこでカントは、内的可能性の「現実的存在をこの絶対的可能性の第一実在根拠」(II79)と名づける。この絶対的可能性の「第一実在根拠」こそが、カントのいう神の存在に他ならない。それゆえ神の存在は「絶対的な現実的必然性」(II82)を有する。このカントの提唱が「神の存在証明の唯一可能な証明根拠」(II63)となるのである。

以上においてカントは、神の存在の証明根拠そのものの考察を「ア・プリオリ (a priori) な道

によって絶対的に必然的な存在から出発したが、今度はア・ポステリオリ (a posteriori) な道によって同じ絶対的に必然的な存在へと上昇する」(II92)。つまりカントは「自然神学を通して神の認識へと上昇しようとする方法」(II68)によって、神の自然神学上の存在証明を懐疑的に吟味しようとする。

3 カントは、第二部、第一考察で「神の存在がア・ポステリオリに推論される」(II93) ことに対して、まず「観察から一般的判断へと注意深く上昇する方法」(II97) を取るとする。第二考察「神に対する万物の依存を道徳的依存と非道徳的依存に分割する」(II100) 場合、いずれかに依るのではなく、自然の「一般的な法則に従って必然的に」(II102) 帰されるものとなる。第三考察「自然秩序の仲介によるか、よらない、神に対する万物の依存について」(II103) も、カントは「それを自然法則に帰する」(II104) とする。第四考察「世界の完全性を自然秩序に従って判定することに対するわれわれの証明根拠の適用」(II108) については「自然が必然的な法則に従って働いている場合、神の直接的な修正がそこに割り込んでくる余地は全くない」(II110) のである。なぜなら「物の本質的な関係は、自然秩序の必然性の諸根拠をなす」(II110) から「自由の法則ですら、それ自体として一般的な自然秩序の規則から独立ではない」(II111) のである。

4 第五考察で「自然神学の通常の方法の不十分性」(II116) が三種類示され、それぞれ批判が加えられる。第一の「方法は、自然秩序を中断させる者の確認に基づく場合」(II116) である。この方法は「自然のあらゆる完全性、調和、美を偶然的なものと考える」(II118) ことによって、と批判する。第二の「方法は、自然の偶然的秩序から創造者である神に到達する場合」(II116) である。この方法は「十分に哲学的でなく」(II119) しかも「自然研究に限界が設けられる」(II119) と批判する。第三の「方法は、自然の規則性における必然性から存在の最高原理であるだけでなく、一切の可能性の最高原理でもある神に達する場合」(II116) である。この方法は「世界のもろもろの組み合わせと技巧的な結合の創造者の存在を証明するには有用であるが、質量そのものの創造者の存在や宇宙の構成要素そのものの起源を証明するには全然役立たない」(II122) と批判する。

5 以上のような自然神学に対する懐疑的な批判から提起されたものが、次の「自然神学の改良された方法の諸規則」(II126) 6点である。ここではその6点の諸規則の要点のみを、ごく簡単に記述しておこう。1 一般的自然法則は神に依存することに負うこと。2 様々の有用性が、一つの根拠において結合されていることの必然性に注目すること。3 無機的だけでなく、有機的自然の中にも必然的統一があることに注目すること。4 創造者の賢明さという第一根拠を、自然法

則の本質的で必然的統一から出発すること。5 世界の偶然的な結合から、宇宙の合成の創造者を推論し、世界の必然的な統一から、自然物の根本素材の創造者を推論すること。6 この方法を一般的規則によって拡大すること....そのさまざまな多様性の統一から、われわれの根本的主張の解明を怠ってはならないこと。以上の諸規則は「一般的自然法則が豊穰性を持つことへの信頼」(II126)によって導かれるのである。

以上のようにカントは、通常自然神学に対する懐疑的吟味を行った後、終りに「神の存在のあらゆる可能な証明根拠」(II156)を二種類に分け、吟味する。第一種「神の存在証明の根拠は、純粹に可能なままのあるものという悟性(Verstand)概念から導かれるのか」(II156)、第二種「神は、それとも実在するものという経験概念から導かれるのか」(II156)のいずれかである。

6 第一種は「帰結としての可能なるものから根拠としての神の実在が推論される」(II156)というものである。これは、先に見た「いわゆるデカルト的証明」(II156, 162)である。カントによれば「ひとは、まず一切のあらゆる完全性を含む可能なるものの概念を思い浮かべる。次にひとは、存在もまた事物の一つの完全性であると考えている。このようにしてひとは、完全なるものの可能性から、そのものの存在を推論する....しかしそのようなことは、実際上ありえない」(II156)のである。カントはさらに第一部、第一考察で述べていたこと、すなわち「存在は述語ではない。従ってまた完全性の述語ではない。それゆえにさまざまな述語の勝手な結合からなる可能性なもの定義から、そのものの存在を推論することはできないし、なおさら神の存在証明ができない」(II156-157)とする。ここにおいてカントは、デカルトによる神の存在証明<sup>22)</sup>に対する批判を行っているのである。

7 第二種は「経験的なものから絶対的第一原因を推論し、さらに第一原因の概念の分析を経て間接的に神の属性を推論するか、あるいは経験的なものからただちに神の存在および諸属性を推論する」(II156)という「ヴォルフ学派の哲学者」(II157)の証明についてである。しかしこの証明も「やはり全く不可能」(II157)である。なぜなら「現に存在するものについての因果律に従って独立の第一原因に到達し、そしてこの第一原因から、この経験概念の論理的分析を通して、神の属性に至るという証明」(II157)の仕方は、結局「経験概念に基づかず、概念から行われている点で、デカルト的証明と同様」(II158)だからである。ここからひとは、概念からの証明により、独断的に「存在を属性の同一あるいは矛盾の中で発見できるというまちがった考えの上に立つ」(II158)ものとなるのである。

カントは『神の存在証明』の序文で「この著作は未完成の形をなしている」(II66)としているのも、現代のような時代では「形而上学といった学問に関しては、一切のものを説明し、証明しよう」(II66)とはせず「見取り図の輪郭を画く」(II66)としていることによっている。それ

ゆえカントは『神の存在証明』の末尾で「とにかく神の存在を確立すればよいのである。それは如何に説明するかということは、さほど重要でない」(II163)として、暗示的にまだ形而上学の入口にあるとして「仕上の不完全さを印象づける」(II66)のである。

### 3 『判明性研究』1764年

カントは『神の存在証明』において、まず「経験概念の論理的分析による証明」(II157)は「デカルト的証明」(II158)であるとして斥け、次に「現実的存在」(II79)を「第一実在根拠」(II79)とし、それを「神の存在証明」(II63)としていた。換言すれば、前者は数学的認識であり、後者は形而上学的認識になるといえよう。この数学と形而上学の関係を問うのが、1763年著作『負量概念の哲学への導入』<sup>23)</sup>である。そこではカントは「数学(Mathematik)では、よく知られている概念を、哲学に関係させながら考察する」(II169)ことにより「新しい展望を切り開こう」(II169)とする。そしてさらに数学的方法と形而上学的方法との具体的区別<sup>24)</sup>を考察した著作が『判明性研究』である。

この『判明性研究』は、ベルリン科学アカデミーにカントが、1763年に提出した懸賞論文で、その論文課題は「形而上学的直観は、特に自然神学と道徳(Moral)の第一根拠が、幾何学的直観と同様に判明性論証が可能か」<sup>25)</sup>である。そこでカントは、形而上学の「認識における可能なかぎりの確実性」(II275)の方法は、ちょうど「自然科学におけるニュートンの方法が、物理学の仮説の乱立を、経験と幾何学(Geometrie)とに従う確実な手続きに変えたのと同様」(II275)とする。従ってカントは、形而上学の方法について「確実な経験的命題とそこから引き出された直接的帰結に限定」(II275)しようとする。

1 カントは、第一考察において「数学的認識と哲学的認識において確実性に到達する仕方と一般的比較」(II276)において、次の4点を指摘する。第一点「数学は、そのすべての定義に総合的に到達するが、哲学は、分析的に到達する」(II276)。ここでは「数学において直角三角形の定義は、明らかに総合によって生じる」(II276)。しかし「哲学の仕事は、混乱した所与の概念を分析し、あますところなく明確にする」(II278)ことである。第二「数学は、その解法、証明、推論において、普遍的なものを記号のもとに具体的に、哲学は、普遍的なものを記号(Zeichen)によって抽象的に考察する」(II278)。そして数学では「算術(Arithmetik)」は「事象そのものではなく、事象の増減関係等々を別々に表示するそれらの記号」(II278)が問題となる。しかし「哲学的思想の関係を記号で表現することはできず」(II279)言葉のみである。第三「数学では、分析できない概念や証明できない命題はごく少数であるが、哲学では、無数である」(II279)。つまり「数学では量一般、一、多、空間等の概念は、少なくとも分析できない」(II279)。しかし形而上学においては「認識の判明性も確実な推論の可能性も分析に依存してい

る」(II280)のである。そして分析はするが「証明できない根本真理の探求こそ、高等哲学のもっとも重要な仕事」(II281)である。第四「数学の対象は、容易で単純であるが、哲学の対象は、困難で複雑である」(II282)。ここでは数学の対象は「量」であり、哲学のそれは「無限に多様」(II282)である。そして数学と哲学の違いは「結果において明らかである」(II283)。すなわち「哲学的認識は、大部分臆見の運命を有し....それらは消滅するが、数学は、存続する」(II283)。このようにカントは、数学とは全く異なる「形而上学は、疑いもなくあらゆる人間の認識のうちで最も困難なものである」(II282-283)とし、しかも「未だかつて一つの形而上学も書かれていない」(II283)ので、ここに形而上学を求める理由の有ることを示す。このようにカントは、第一考察では、数学的認識の確実性(Gewißheit)を範形にして、哲学的認識の確実性を考察しているといえよう。ただ数学的認識の確実性を基準にしているところは、デカルト的な知識学、普遍数学に範を取っているように、考えられるところである。

2 第二考察「形而上学においてできる限りの確実性に到達すべき唯一の方法」(II283)について論述する。そこでは「形而上学は、われわれの認識の第一根拠に関する哲学に他ならない」(II283)。そして形而上学の確実性が獲得されるような第一規則は「決して定義から始められてはならない」(II283)ことである。第二規則は「形而上学においては、常に確実に知られるようなことが、たとえ僅かであろうとも特別に選び出されるべきである」(II285)ということである。このようにしてカントは「形而上学の真の方法は、ニュートンが自然科学に導入し、そしてそこで極めて有効な効果を示した方法と根本的に同一である」(II286)と結論づける。

3 カントは、第三考察「形而上学の確実性の本性について」(II290)では、以上での論述を再確認し、さらに3点にわたり展開する。それは第一点「哲学的確実性は、一般に数学的確実性とは本性を異にする」(II290)ことである。その相違はカントによれば、まず第一に「数学は、総合的にその概念に到達している」(II291)と確信することができる。それに対し「哲学、そして特に形而上学をこれ(数学)と比較すると、それ(形而上学)は、その定義においてどのような定義を与えようとも、はるかに不確実である」(II291)。第二に「数学は、普遍的な認識を記号の下に具体的に考察する」(II291)のに対し「哲学は、認識を記号の傍らで依然として抽象的に考察する」(II291)のである。第二点「形而上学は、確信するに足る確実性が可能である」(II292)ことである。つまりカントによれば「経験から熟知されているように、われわれが理性的根拠によって、数学以外でも多くの場合に、確信に至るまで信念を強めることができる」(II292)のである。従って形而上学の誤謬が発生する理由は「われわれが或る事物を知らない場合に生ずるだけでなく、われわれが必ずしも判断に必要な一切をまだ知らないのに判断しようと企てる場合にも生じる」(II292)のである。第三点「形而上学における第一根本真理の確実性

は、数学以外の他の理性的認識における確実性と別種のものではない」(II293) ことである。とはいえ「形而上学にも、数学と同じだけの確信を生み出す必要な確実性は可能であるが、ただし数学の方がより容易であり、直観にあずかる程度がより大である」(II296) とするのである。

4 カントは、第四考察で「自然神学と道徳の第一根拠がもちうる判明性と確実性について」(II296) 論述する。そこでまず自然神学について、カントは『神の存在証明』で示したように、第一節で「自然神学の第一根拠は、最大の哲学的明証性を持ちうる」(II296) とする。ここで「形而上学者に提示される主要概念は、一つの存在者の絶対的に必然的存在である」(II296-297) とするなら「神についての形而上学的認識は、きわめて確実」(II297) なものとなる。一方、これに対し「道徳の第一根拠は、現段階ではいまだ必要なすべての明証性 (evidentia) を持ちえない」(II298) ことを判明にしようとする。そこでカントは当為 (Sollen) の「なすべし」という拘束性は「一つの形式で表現される」(II298) とする。この当為のうち拘束性は「手段の必然性 (蓋然的必然性)」(II298) でなく「目的の必然性 (適法的必然性)」(II298) を示す。この必然性の二つの分類は『実践理性批判』では、仮言的命法と定言的命法 (V20) として論述される場所である。そして義務の命令は「直接的に必然として命令しなくてはならない」(II299)。それゆえカントによれば「すべての拘束性のそうした直接的な最高規則は、証明不可能でなければならない」(II299) ものである。次にカントは、認識能力に対し「善を感じる能力は、感情 (Gefühl) である」(II299) が「善を分析できない感情も存在する」(II299) ので「これは善だという判断は、完全に証明不可能である」(II299) とする。しかしながらこれを証明可能なるものとするためには、命令としての「拘束性の最高の根本概念が、まず第一に規定されなければならない」(II300) ので、カントは「実践哲学の欠陥の方が、思弁〔理論〕哲学よりも一層大きい」とする。だがここで確かにいえることは、カントが道徳とその第一根拠について初めて論述しているという事実である。しかもここに表現された諸概念、当為、拘束性、手段と目的、義務、命令、善、感情などの関連づけを論述する実践哲学は、後年の1785年著書『道徳形而上学原論』や1788年著書『実践理性批判』において結実するものとなるのである。

(未完)

(注)

1) Kant, Immanuel: *Kritik der reinen Vernunft*, 1. Aufl. 1781. 2. Aufl. 1787. in: *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften. (abgek. KGS.). Bd. III, Berlin 1911. 引用箇所を表示は、慣例にならい、第一版をA、第二版をBとし、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に ( ) で示し、典拠を記するものとする。カント・原佑訳「純粋理性批判」『カント全集』第四五六卷所収、上中下、理想社、1966、1973年。カント・有福孝岳訳『カント全集』456所収、上中下、岩波書店、2001、2003、2006年。



- 2) Kant, I.: *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*, 1770. in :KGS. Bd. II, Berlin und Leipzig 1912. 参考欧文訳として、ヒンスケ (N.Hinske) の独訳 (1958年)、ロィシャー (J.A.Reuscher) の英訳 (1958年)、ウォルフオード (D.Walford) の英訳 (1992年) が挙げられる。引用箇所の表示は、アカデミー版カント全集の原著本文に基づき巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に ( ) で示し、典拠を記すものとする。カント・川戸好武訳「可感界と可想界との形式と原理 (1770年)」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・山本道雄訳「可感界と可想界の形式と原理」『カント全集』3所収、岩波書店、2001年。
- 3) Zu Marcus Herz, 1781. 1. Mai. *Kant's Briefwechsel*. in: KGS. Bd. X, Berlin und Leipzig 1922. S.266-267.
- 4) Zu Christian Garve, 1783. 7. August. *Kant's Briefwechsel*. in: KGS. Bd. X, Berlin und Leipzig 1922. S.336-343.
- 5) Paulsen, Friedrich: *Immanuel Kant, seine Leben und seine Lehre*, Fr. Frommanns Verlag, Stuttgart, 1. Aufl. 1898. 6. Aufl. 1920. S.76. パウルゼンのこの区分に対して、桑木巖翼は、明確な区別は不可能としつつ、前批判期の区分を検討する。桑木巖翼『カントと現代の哲学』岩波書店、(1917年) 1948年、18-36ページ。
- 6) Kant, I.: *Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte*, 1747. in: KGS. Bd. I, Berlin 1910. S.1-181. カント・亀井裕訳「活力測定考 (1747年)」『カント全集』第一巻所収、理想社、1966年。カント・大橋容一郎訳「活力測定考」『カント全集』1所収、前批判期論集 I、岩波書店、2000年。
- 7) Kant, I.: *Allgemeine Naturgeschichte und Theorie des Himmels*, 1755. in: KGS. Bd. I, Berlin 1910. S.215-368. カント・高峯一愚訳「天界の一般自然史と理論 (1755年)」第十巻所収、理想社、1966年。カント・宮武昭訳「天界の一般自然史と理論」『カント全集』2所収、前批判期論集 II、岩波書店、2000年。
- 8) Cassiere, Ernst: *Kants Leben und Lehre*, verlegt bei Bruno Cassiere, Berlin, 1. Aufl. 1918. 1921. S.23. (abgek.Kants Leben). E. カッシーラー・門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年、27ページ。
- 9) Ebd., S.23. 前掲訳、28ページ。
- 10) mは、質量 (mólés) を、vは、速度 (vélocitás) を意味する。
- 11) Alembert, Jean Le Rond d': *Traité de dynamique*, dans lequel les loix de l'équilibre, Paris, David, 1743. Bruxelles, Culture et Civilisation, 1967. p. i -X XVI. ダランベールの『動力学論』については例えば、次を参照。寺田元一『「編集知」の世紀』第八章ダランベールの「体系知」日本評論社、2003年、168-171ページ。
- 12) Cassiere: Kants Leben, S.23. 前掲訳、28ページ。
- 13) 動力学について、後年のカントは、著作『自然科学の形而上学的原理』(*Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*, 1786. in: KGS. Bd. IV.) の物的自然の形而上学の一部門で次のように規定する。すなわち動力学とは、物質に力が内在することを認める物質の性質や振舞いを内在的に還元して理解する学である。従って、そこではデカルトとライブニッツ学派ではなく、ライブニッツ学派を支持している。
- 14) Kant, I.: *Untersuchung der Frage, ob die Erde in ihrer Umdrehung um die Achse einige Veränderung erlitten habe*, 1754. in: KGS. Bd. I, 1910. カント・大橋容一郎訳「地球自転論」『カント全集』1所収、前批判期論集 I、2000年。
- 15) カントは『天界自然史論』で太陽系起源説を提唱するが、それとは別に後年フランス人ラプラス (P.S.M. de Laplace) が『宇宙体系論』(Laplace, Pierre Simon, Marquis de: *Exposition du système du monde*, Paris 1796. Fayard 1984.) を1796年に表わし、力学的世界観から星雲説を唱える。これが後に、カント=ラプラスの星雲説と呼ばれるようになる。
- 16) Kant, I.: *Kritik der praktischen Vernunft*, 1788. in: KGS. Bd. V, 1908. カント・深作守文訳「実践理性批判」『カント全集』第七巻所収、理想社、1965年。カント・坂部恵・伊古田理訳「実践理性批判」『カント全集』7所収、岩波書店、2000年。ここでの言明は「わが上なる星のきらめく天空とわが内なる道徳法則」とは「感嘆と崇敬とをもって心を充す」(V161) というものである。
- 17) Kant, I.: *Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio*, 1755. in: KGS. Bd. I, Berlin 1910.

- S.385-416. 参考欧文訳として、ヴァイシェーデル (W.Weischedel) の独語対訳 (1960年)、ロイシャー (J.A.Reuscher) の英訳 (1958年)、ウォルフオード (D.Walford) が挙げられる。カント・山下正男訳「形而上学的認識の第一原理」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。カント・山本道雄訳「形而上学的認識の第一原理」『カント全集』2所収、前批判期論集Ⅱ、岩波書店、2000年。
- 18) Kant, I: *Der einzig mögliche Beweisgrund zu einer Demonstration des Daseins Gottes*, 1763. in: KGS. Bd. II, S.63-163. カント・山下正男訳「神の現存在の論証 (1763年)」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。カント・福谷茂訳「神の存在の唯一可能な証明根拠」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 19) Kant, I: *Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral*, 1764. in: KGS. Bd. II, Berlin und Leipzig 1912. S.273-301. カント・川戸好武訳「自然神学と道徳の原理の判明性 (1764年)」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・植村恒一郎訳「自然神学と道徳の原理の判明性」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 20) ここでの「絶対的必然性と条件的必然性」の区別は、カント『実践理性批判』での定言的命法と仮言的命法 (V20) の区別に該当するものになるといえよう。
- 21) Leibniz, Gottfried Wilhelm von: *Principes de la philosophie ou Monadologie*, 1714. *Monadologie*, in: *Philosophische Bibliothek*, Bd.253, Felix Meiner Verlag GmbH. Hamburg 1982. § 80, 81, S.62-65. ライプニッツ・西谷裕作訳「モノドロジー〈哲学の原理〉」『ライプニッツ著作集』9所収、後期哲学、工作舎、1989年、第80. 81節、237-238ページ。
- 22) Descartes, René: *Discours de la Méthode*, 1637. in: *Oeuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Correspondance VI, J.Virin Paris 1965. p.33-36. in: *Philosophische Bibliothek*, Bd.261. Felix Meiner Verlag GmbH. Hamburg 1960. S.54-59. デカルト・野田又男訳『方法序説・情念論』中公文庫、中央公論新社、1974年、45-47ページ。
- 23) Kant, I: *Versuch den Begriff der negativen Größen in die Weltweisheit einzuführen*, 1763. in: KGS. Bd. II. Berlin und Leipzig 1912. カント・山下正男訳「負量の概念」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。カント・山田史令訳「負量概念の哲学への導入」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 24) カントの数学と哲学についての論述は『純粹理性批判』の第二版序文 (B X IV) や超越論的方法論 (A 714-719, B 742-747) でなされるものとなる。
- 25) Menzer, Paul: *Untersuchung für die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral* (Anmerkungen). in: KGS. Bd. II, Berlin 1912. S.493.

## 参考文献

- 有福考岳・坂部恵編『カント事典』弘文堂、1997年。
- Bock, Monica (1960): *Immanuel Kant*, Werkausgabe in zwölf Bänden. Hrsg. von Wilhelm Weischedel, Bd. 1, (Suhrkamp Taschenbuch Wissenschaft 186), 1960.
- Cassiere, Ernst (1918): *Kants Leben und Lehre*, verlegt bei Bruno Cassiere, Berlin, 1. Aufl. 1918. 1921. E. カッシーラー・門脇卓爾・高橋昭二・浜田義文監修『カントの生涯と学説』みすず書房、1986年。
- 福谷茂「解説 (神の存在の唯一可能な証明根拠)」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 浜田義文 (1967)『若きカントの思想形成』勁草書房、1967年。
- 浜田義文『カント哲学の諸相』法政大学出版局、1994年。
- Heinrich, Dieter: *Der Ontologische Gottesbeweis*, Tübingen 1967. ヘンリッヒ・本間謙二・須田朗・中村文郎・座

- 小田豊訳『神の存在論的証明－近世におけるその問題と歴史』法政大学出版局、1986年。
- Hinske, Nobert (1958): *Über die formen und die Prinzipien der sinnlichen und intelligenten Welt*, übersetzt von Nobert Hinske, 1958.
- 石川文康『カント第三の思考』名古屋大学出版会、1996年。
- 亀井裕「解説『活力測定考』（1747年）」『カント全集』第一巻所収、理想社、1966年。
- Jaspers, Karl (1957): *Drei Gründer des Philosophierens, Plato, Augustin und Kant aus dem Werk, Die großen Philosophen*, Bd.1, R. Piper & Co. Verlag, München 1957. 50.-55. Tausent 1967. ヤスパーズ・重田英世訳『カント』〔ヤスパーズ選集8〕理想社、1962年。
- Kaulbach, Friedrich (1969): *Immanuel Kant*, Walter de Gruyter & Berlin 1969.2.Aufl.1982. カウルバッハ・井上昌計訳『イマヌエル・カント』理想社、1978年。
- 川戸好武「解説『自然神学と道德の諸原理の判明性について』（1764年）」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。
- 木阪貴行「カントと神の存在証明」カント研究会編『批判的形而上学とは何か』現代カント研究2所収、理想社、1990年。
- 桑木巖翼『カントと現代の哲学』岩波書店、(1916) 1948年。
- 松山寿一「力と渦－カントの宇宙発生論十七、十八世紀の思想諸潮流」カント研究会編『自然哲学とその射程』現代カント研究4所収、晃洋書房、1993年。
- 松山寿一『若きカントの力学観『活力測定考』を理解するために』北樹出版、2004年。宮武昭「解説（天界の一般自然史と理論）」『カント全集』2所収、前批判期論集Ⅱ、岩波書店、2000年。
- 小熊勢記『カントの批判哲学－認識と行為－』京都女子大学版、1992年。
- 大橋容一郎「活力と死力－『活力測定考』をめぐって」カント研究会編『自然哲学とその射程』現代カント研究4所収、晃洋書房、1993年。
- 大橋容一郎「解説（活力測定考）」『カント全集』1所収、前批判期論集Ⅰ、岩波書店、2000年。
- Reuscher, John A. (1986): *Kant's Latin Writings Translation, Commentaries and Notes*, ed. Beck, Lewis White, New York, 1986.
- Schmucker, Josef (1980): *Die Ontologie des vorkritischen Kants*, Berlin, de Gruyter, 1980.
- Schultz, Uwe (1965): *Immanuel Kant*, in: Rowohlt's Monographien, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg 1965. シュルツ・坂部恵訳『カント』（ロコロ伝記叢書）理想社、1982年。
- 高橋昭二（1969）『カントの弁証論』創文社、1969年。
- 高橋一愚「解説『天界の一般自然史と理論（1755年）」『カント全集』第十巻所収、理想社、1966年。
- 植村恒一郎「解説（自然神学と道德の原理の判明性）」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 宇都宮芳明『カントと神 理性信仰・道德・宗教』岩波書店、1998年。
- Walford, David (1992): *The Cambridge Edition of the Works of Immanuel Kant, Theoretical Philosophy*, 1992.
- 山田弘明「カントとデカルト的証明」『名古屋大学文学部研究論集』哲学編52、2006年3月。
- 山本道雄「解説（形而上学的認識の第一原理）」『カント全集』2所収、前批判期論集Ⅱ、岩波書店、2000年。
- 山下正男「解説『形而上学的認識の第一原理』（1755年）」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。
- 山下正男「解説『神の現存在の論拠』（1763年）」『カント全集』第二巻所収、理想社、1965年。
- 森哲彦「カント純粹理性批判の解明」名古屋市立大学人文社会学部『研究紀要』第17号所収、2004年11月。
- 森哲彦「カント批判哲学としての現代」名古屋市立大学人文社会学部『研究紀要』第20号所収、2006年3月。
- 森哲彦「カント実践理性の解明」名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』第5号所収、2006年6月。